

ブラックのラブラドル『ブラッキー』を亡くしてから、丁度半年過た頃大泉さんから『牛丸さんに是非飼って頂きたいと思う犬がいるのだけれど』と言う連絡を受ました。あれから半年は過たものの、まだまだブラッキーの姿が頭から離れず、とても又飼う気にはなれなかったのですが、娘と主人はもう大分前からもう一度犬を飼いたくてうずうずしていた様です。私が、『ちょっと考えさせて下さい』と言って電話を切ってからその話をすると、もう今すぐにも見に行きたいと言いつつ始末でした。その犬とは、盲導犬として働いていたラブラドルとゴールデンレトリバーとの掛け合わせで、ラブより少し大きな目の体に、大きな澄んだ目を持った陽気な犬でした。大泉さんが、『5歳にしては若いし、管理が良く出来ている』とおっしゃった通でした。一生懸命人の顔を見上げては、笑い掛いています。これが同じ犬かしら、あのブラッキーはいたずら盛りでしたから毎日が戦争でした。それに比べ、このラビーはとても犬とは思えない程です。部屋の中に何が置いてあっても状態はそのままですし、主人がじっとしていれば何時間でも側でじっとしています。(盲導犬なら、当前なのですが。)それは、私達にとって本当に驚きでした。ハヤンちゃん子供程親には可愛いVと言う意味で、私はブラッキーを溺愛していました。が、しかし又良く訓練され、じっと静かに主人と行動を共にし、素早く主人の心を読む、と言う事、これも又、犬と人間の間に大きな絆が出来る事を知りました。今ではラビーのいない生活なんてとても考えられません。確かにラビーには、ブラッキーの様な頭の回転の早さと精悍さはない様です。しかし、おとなしくて、優しさがあります。この事は夫々の犬独自の個性でしょうか、それともやはり、犬種の特長なのでしょう。ハラブとゴールデンを親に持つ子の二世は決して作ってはいけないVと言うおきてがあるようですが、これ程盲導犬に相応しい犬は二度と出てこないと言う事なのでしょう。

こんなに素晴らしいラビーとの出会を与えてくれたのは、ブラッキーなのだと言う事を、何時も忘れないでいたいと思います。